

GLOBAL VOYAGE

[グローバル ヴォヤージュ]

PEACE BOAT

2018

Spring

太平洋に浮かぶ楽園
魅惑のイースター島

第二特集

世界三大瀑布に迫る

【発行】(株)ジャングレイズ

太平洋に浮かぶ楽園 魅惑のイースター島へ

南太平洋に浮かび、チリ本土から3500kmも離れた絶海の孤島「イースター島」。乗船予定者のアンケートやピースボートスタッフからも人気No.1の寄港地だ。神秘に包まれたこの島は、モアイ像だけでなくさまざまな文化や伝統など魅力がいっぱい。一方で近年の観光化によって島ではある問題が起きている。ピースボートの船旅を通して知ることができるイースター島の今に迫ってみる。

EASTER ISLAND

★
イースター島



CONTENTS

特集

太平洋に浮かぶ楽園

魅惑のイースター島 P3

イースター島の歴史 P4

地図で見るモアイ像 P6

イースター島交流コース P8

第二特集

世界三大瀑布に迫る P10

船内生活[体験談] P14

船内生活[Pickup] P16

船内生活[自主企画] P18



Ocean Dream

チリ・イースター島から望むオーシャンドリーム号

表紙の写真
イースター島と
いえばモアイ
像。第100回、
101回クルー
ズで寄港予定。



は諸説あるが、遅くとも10世紀頃には造りだされたとされ、村に点在した集落を守るようにいたるところで造られていた。モアイの材料には島内の「ラノ・ラク」と呼ばれる噴火口跡で採石できる凝灰岩が使われている。

18世紀頃には、人口増加に伴いモアイ像造りの「最盛期」を迎えたイースター島だが、そのための森林伐採が自然破壊を引き起こし、深刻な食糧危機に直面する。これをきっかけに部族間の衝突も増加し、島中を巻き込んだ戦乱の時代に突入してしまう。結果として多くのモアイ像が倒され、今でも島には倒れたままのモアイ像が点在している。

島民たちによる争いの末、いつしかモアイ像は造られなくなり、その結果生み出されたのが「鳥」を崇拜する文化だ。その文化は、海に閉ざされたこの島で、自由に飛ぶ鳥こそ神の力が宿っているという考えに基づいている。この島でそれを語るのに外せないのが、島の南西部に位置する「オロンゴ岬」。青い空、濃紺の海を望むことで、地元の人たちも「ここから見る海が一番美しい」というくらいの絶景のポイントだ。ここであつて行われていたのが



島の南西に位置する火山「ラノ・カウ」。直径約1600m、水深4～5mの巨大な火山湖は島の貴重な水源でもある。



4:倒されたままの15体のモアイ像(アフ・トンガリキ)が日本のクレーン会社によって立てられたのは有名な話。5:鳥人儀礼の舞台となった小島は遥か遠くに。石碑にも鳥人の絵が描かれている。



1:伝統衣装を着たラパヌイの男たち。今も昔もたくましい。2:アフ(祭壇)がないものや倒されたものなど、さまざまなモアイ像が点在する。3:朝や夕焼けは神々しい景色が一面に広がる。



紺碧の海を望む 南太平洋の秘境イースター島

周囲数千キロに渡って島影を見ない「絶海の孤島」とイースター島。大型客船が停泊できるような港湾施設がないため、オーシャンドリーム号を沖合に錨泊させ、テンドーボートに乗り替えて上陸をする。テンドーボートが着くポイントは当日の天候や波の高さなどで変わり、場所によっては船からモアイ像を望めることも。さらに現地の人によると、稀に大きなウミガメを見ることができるといい、そこが豊かな海であることを知ることができる。

イースター島という名前は、1722年にオランダ人が初めて訪れた日が

「復活祭(イースター)」であったことにちなんで名づけられたとされる。一方で現地では「ラパヌイ(大きな島)」と呼ばれ、今でもポリネシア※系住民をはじめ4000人以上がこの島で暮らしている。1990年代初期には2500人程度だったといわれる人口も、観光化とともに人数が増え、村にはホテルなどの宿泊施設がどんどん増えている状況だ。

歴史をさかのぼってみると、この島に人が住み始めたのは、4～5世紀のこと。ポリネシアの島々から人々が移住してきたことがきっかけとされる。この島の象徴であるモアイ像について

「鳥人儀礼」というもの。その内容は、彼らが崇拜する創造の神「マケマケ」をこの島に導いたとされるケンカンドリの卵を、オロンゴ岬の絶壁の下の小島まで泳いで獲りに行き、もつとも早く島へ持ち帰ってきた者がその年の支配者「鳥人」になれるというものだ。

イースター島といえばモアイ像のイメージが強いが、海も非常にきれいなことで有名。断崖絶壁に囲まれた島で人気の真つ白な砂浜をもつアナケナビーチは、エメラルドグリーンの海が美しい。ここでは「アフ・ナウナウ」と呼ばれる7体のモアイ像を見ることができ、帽子のようなものを被っているものもあるなど、この島にあるどのモアイ像もひとつとして同じものがないことに気づき始める。ピースボートスタッフからも絶大な人気を誇り、神秘に包まれた島は、まさにパワースポットそのものだ。

※ポリネシア:太平洋の北南東にそれぞれ位置する、ハワイ、ニュージーランド、イースター島を結ぶ三角形の広大な地域になる無数の島々のことを指す。



4 アフ・ナウナウ
帽子を被ったモアイ

島内でも帽子を被っているモアイ像は数少なく、その中でも複数体並んで立っている珍しい場所。比較的新しいモアイ像だとされる。



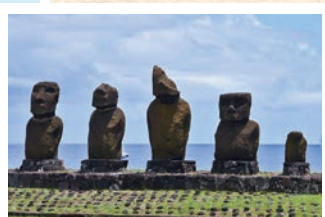
5 アフ・アキビ
海側を見る7体

島内の多くのモアイ像が海を背にして立っているのに対し、このモアイ像は海に向かって立っていて、人の集落があった形跡がないことなどが特徴。



6 プナ・パウ
帽子の切り出し場

モアイの頭にのせる帽子(プカオ)の切り出し場所でも赤い石が残る。ちょっとした高台で眺めも楽しめる。



7 アフ・タハイ
目玉のあるモアイ

モアイ像に目玉が付いた珍しい1体も。夕暮れ時には、バックに輝く夕陽を見るために多くの人が集まる。

8 アフ・バイフ／アフ・アカハンガ
このあたりは倒されたモアイが多い

島内で起きた争いの激戦区と推測され、今なお倒されたままのモアイ像が多い。一番大きいアフは、イースター島初代の伝説の王・ホツマツアの墓といわれている。



1 ラノ・ララク
石切り場もある数多くのモアイ群

この場所で採石できる凝灰岩は柔らかく加工しやすいのが特徴。ほとんどのモアイはここで造られたとされ、モアイ製造工場とも呼ばれる。



2 アフ・トンガリキ
横一線に15体のモアイ

この島一番の撮影スポット。昼だけでなく明け方には真っ赤に染まる神秘的な光景を望むことができる。大阪万博に来ていたモアイ像もこの近くに。



3 テ・ピト・クラ
光のヘソと呼ばれる石

ラバヌイ語で「光のへそ」を指す。どのような意味を持っていたのか、そしてどのような儀式が行われていたのかについてはいまだに謎のままで。



ひとつとして同じものはないモアイ像

この島にあるモアイ像はなんと約1000体。それらは姿や大きさ表情など、造られた時代や部族によってもさまざまで、とても興味深い。

中でも注目のスポットが、モアイ像の製造場所だったとされている「ラノ・ララク(①)」。ここには、岩から切り離される途中と思われるものや完成途中のもの、体の一部しかないものなど、数にして約390体ものモアイが点在する。

中には、「正座するモアイ像」などの珍しいものも見ることが出来る。ビューポイントとして有名なのは15体ものモアイ像が並ぶ「アフ・トンガリキ(②)」。

これらが発見された時は、いずれも倒れたまま島内に散らばっていたとされるが、今はすべてきれいに「一列に並んでいる。さらにこれらの近くには、1970年開催の大阪万博で展示されたものも含まれていて、懐かしの再会を果たす乗船者も少なくない。ここは島の東側に位置し、日の出の時間は朝日をバックに美しい光景も広がり必見だ。

最後にこれらを見学するにあたって気をつけたいのが、神聖とされるアフ(祭壇)の上に登ってはいけないということ。このあたりは船内で事前に知る機会があるのでしっかりと学んでおきたい。

Food & Goods



さまざまな食材をバナナの葉で蒸す郷土料理。



青空の下で食べるお肉は絶品。

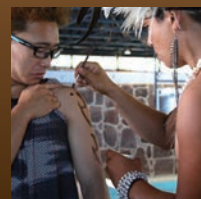


ツナやタコなどが入ったパン「エンパナーダ」は美味。



お土産はもちろんモアイ像にまつわるものが人気。

モアイ像の形をした地酒ビスコまで。



伝統文化に触れる

この島に古くから伝わる伝統舞踊も現地で体験できる。ボディペインティングなども楽しめ、気分は何百年も前にタイムスリップ。



現在の問題を知る

リサイクルセンターでは、その島で出たゴミすべてが集まる。缶の圧縮機も導入されるなど、着々と設備は整ってきている。



観光化のそばで起きている「ごみ問題」に向き合う

世界でも有数の観光スポットとして、観光客数は年々増加の一途をたどるイースター島。そんなこの島が直面しているのが深刻な「ごみ問題」だ。もともとチリはワインの生産が有名で、ぶどうやその他農作物に対する外来種被害を取り締まるため出入国の際には検疫が厳しく行われている。しかしそのような中イースター島で起きてしまったのが、海外からの外来種による村全体のデング熱流行。その結果、イースター島のものをチリ本土に一切持っていくけないという厳しい規制が始まってしまった。

こうして、ごみの処理設備が充分でない島内では、世界中から来る観光客のペットボトルや缶なども島で処理する必要が出た。それに加え、島民らの家庭で出たごみなども野原で分別なく焼却され、常に黒煙が立ち上っているといった状況が長く続いていた。

その光景を見たピースボートスタッフが自分たちにも何かできることはないかと動き出したのが2006年のこと。同じような危機感を抱いていた現地の小学校の先生とともに、子どもたちに「もったいない」という日本の文化を教えたり、リサイクルの方法を劇で教えたりするなどの環境活動が始まった。同時にピースボートは市長との面会も実現。市長の賛同を得て、島内には新たにリサイクルセンターが設立された。まもなくして缶ご

みの消毒方法も整備され、本来は本土に持つていけなかったはずのごみも一部は持つていけるような制度変更も実現した。スタッフの小さな歩から、島民の環境に対する意識も着実に根付き始めている。ピースボートがこの島で行っている活動はこれ以外にもある。そのひとつが、ピアニカや文房具などを現地の子どもたちに届ける活動。市の予算が少ないうことで、生徒らにそれらを揃えてあげられないことを知り、日本で集めたものを寄港のたびに届けるという活動を10年以上続けている。今では農機具や自転車など、現地の人が本当に必要としているものを届けながら、心あたたまる交流が毎年続いている。

現地に住む人々との交流はピースボートの船旅の大きな魅力。気になるコースはぜひ今のうちにチェックしておきたい。

文化や歴史に触れる 船内イベントも充実



衣装やペイントは古くから伝わるもので迫力のステージ。

イースター島へ着くまでは、船内で企画も多数行われる。以前、水先案内人として乗船していただいたのは、現地の若者たちが立ち上げた島唯一のNGO団体「TOKI」。彼らは島の文化や伝統を継承すべく、世界各地での伝承活動をはじめ、島の子どもたちに対する音楽教育などさまざまな活動を行っている。

船内では、伝統的な歌や踊りのパフォーマンスを披露し、ラパヌイ語のレクチャーなどイースター島文化を存分に楽しめる企画が行われた。他にも、漁民の村であった島の昔の暮らしをはじめ、モアイ像について詳しく知ることができる「モアイ像講座」なるものも。アフ（祭壇）に登ってはいけな

いなど、見学に際しての注意事項もここで学ぶことができた。そして島で起きている「ごみ問題」にも目を向

け、持続可能な社会に向けてグリーン・ツーリスト（環境に配慮する旅行者）になってほしいという彼らの想いを聞ける機会でもある。

ピースボートで訪れる全寄港地の中でも特に人気の高いイースター島。寄港前に船内の企画にも参加して、この島の文化や人々の魅力を存分に味わってほしい。



イースター島に古くから伝わる伝統的なパフォーマンス。



TOKIのメンバーによる貴重な講座。

Iguazu Falls

2段構造の滝が多いのもイグアスの滝の大きな特徴。地球が生み出した壮大な自然景觀に思わず息を呑む。

第二特集

世界三大瀑布に迫る

Iguazu Falls

Victoria Falls

Niagara Falls

ピースボートクルーズに乗って訪れることができる世界の代表的な瀑布が3つ。それが南米大陸のイグアスの滝、アフリカ大陸のビクトリアの滝、そして北米大陸のナイアガラの滝だ。地球が生み出した壮大な自然美は、世界中の人々を魅了し続けてやまない。

ダイナミックな滝のスケールは世界一

「イグアスの滝」

ブラジルとアルゼンチンの国境にまたがる「イグアスの滝」。迫力といえば世界中のすべての滝のなかでも世界一といっても過言ではない。滝に近づくにつれ聞こえてくる轟音は、毎秒65000トンもの圧倒的な水量によるもの。大小275の滝からなり、最大落差は80メートル以上、滝幅はなんと約4キロメートルという圧倒的なスケールだ。その様子から名付けられた「イグアス」という名は先住民族の言葉で「大いなる水」という意味だ。

この場所の楽しみ方のひとつが、滝を間近で拝むことができる遊歩道散策。イグアスの滝がある国立公園は約2割がブラジル側で、残りがアルゼンチン側というように分かれている。その→

れば各所で虹を見つけることもできる。くつきりとその姿が現れるチャンスは日差しが傾く午後。一日中シャッターチャンスは続くが、滝の間近まで近づける分、カメラやスマートフォンの防水ケースや撥水性の高いバッグがあると便利。オーバーランドツアーを申し込むと行ける有料のヘリコプターも人気が高い。時間にして15分程度の間に、滝を囲むようにどこまでも広がる濃い緑のジャングルが眼下に広がる。広さはブラジル側が約185000ヘクタール、アルゼンチン側が約65000ヘクタールで、合わせて東京都とほぼ同程度だ。

両側に通じる遊歩道からはそれぞれの景色の違いを楽しめる。滝の全貌を楽しむならブラジル側、いろんな角度から滝を楽しむならアルゼンチン側がおすすめだ。特にアルゼンチン側で見ることができ「悪魔の喉笛」は必見。体の芯まで揺れるかのような轟音からそのように名付けられた迫力のスポットだ。さらに歩を進めると、運がよければ→

これら一帯の国立公園は世界自然遺産に登録され、アマゾンの豊かな動植物や自然を観察することもできる。遊歩道を歩いていても、ふさふさした毛並みにかわいらしい目をした「ハナグマ」が見られることも。ハナグマ以外にも、日本では見かけない蝶などさまざまな生き物たちが生息している。

地球の裏側という普段なかなか行くことのできない場所だけに、参加者の満足度も非常に高い。記念すべき第100回地球一周クルーズで訪れることになるイグアスの滝。ハイライトにふさわしい迫力満点のスポットだ。



1



3



2



4

1:ヘリコプターからの景観は圧巻。2:イグアス川とパラナ川が合流する地点にはブラジル・アルゼンチン・パラグアイの三国国境の記念碑が建つ。3:ツアー参加者はジャングルに大興奮。4:野鳥園にはトゥマコなど珍しい鳥も。

最大落差108mからの水煙は大迫力

「ビクトリアの滝」

アフリカ大陸南部のザンビアとジンバブエの国境に位置する「ビクトリアの滝」。この滝の最大の特徴はなんといっても「高さ」だ。滝から落ちる水量は三大瀑布の中でも随一といわれ、雨季

には噴煙と見間違うほどの水煙が垂直になんと最大500mほど立ち上がる。現地の言葉で「雷鳴轟く水煙」を意味する「モシオ・トゥニヤ」という別名があるほどの大迫力が魅力だ。



Victoria Falls

一般的な呼称「ビクトリアの滝」は、かつてイギリスの探検家リビングストンが冒険の末に再発見し、あまりの偉容に女王の名前を付けたとされる。



1:圧倒的な高さゆえ、水しぶきは遊歩道まで。2:サバンナにはカバをはじめ豊富な動植物がたくさん。

そして多数の滝が流れ落ちるジンバブエ側と、より近くで滝の迫力を体感できるザンビア側の双方から滝を楽しむのもポイント。

この滝の特徴的なところは、周囲数百キロメートルにわたって広がるサバンナに、突如割れ目のような大迫力の深い渓谷が現れるところ。これら一帯は1989年に世界自然遺産に登録され、アフリカゾウやバツファローといったアフリカならではの動物を見ることが出来る。植物では、ナツメヤシやナッツ類といった、本来であればこの地域には見られないはずの熱帯の植物の姿も。実はこれらはすべて滝の噴煙が降り注いだことによるもの。アフリカの肥沃な大地が生み出した自然の驚異を肌で感じられる魅力溢れる場所だ。

単独で流れる滝の水量が北米で最大

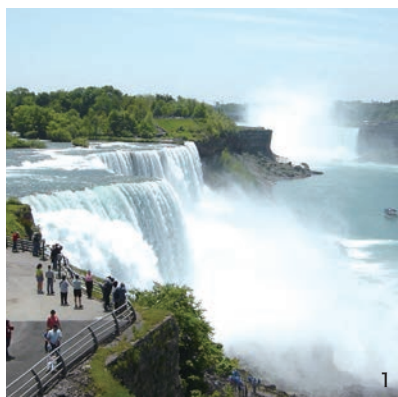
「ナイアガラの滝」

アメリカとカナダの国境に位置し、日本からも比較的行きやすく人気の観光地である「ナイアガラの滝」。五大湖のひとつであるエリー湖の水がオンタリオ湖に注ぐその途中のナイアガラ川にできた巨大な滝で、滝の高さはあまりないが幅が広く、単独で流れる滝の水量では北米で最大規模だ。

また季節によって表情が変わるのも特徴のひとつ。水が崩れ落ちる早春に始まり、滝に虹がかかる夏、秋冬の夜のライトアップなど、見る人によってもお気に入りの光景はさまざま。アクセスのよさから、クルーズでなくとも気軽に訪れることはできるが、他2つの滝を訪れたことがある方はぜひともこの機会に世界三大瀑布すべてを制覇してほしい。



この場所ぜひ訪れてほしいのが、カナダ側にある展望台「スカイロンタワー」。地上約236mから、360度のパノラマを眺望可能だ。他にもアメリカ側から乗船できるツアー船「霧の乙女号」は滝壺の寸前まで近づくことができ、人気の高いアトラクション。滝を上から眺めたり、船上から水しぶきを浴びたりと、さまざまな角度から景色を楽しむのがこの滝の最大の魅力だ。



1:世界三大瀑布の中では唯一世界遺産に登録されていないが、観光客からの人気は高い。2:ヘリツアーはここでも人気。ナイアガラのすべてを堪能できる。

アメリカとカナダの国境も兼ねていて、レインボーブリッジという橋を渡ると徒歩で国境を越えることもできる。

Niagara Falls





船内生活

乗船してみて感じた

体験談

乗船までの準備は？ 船内生活はどんな日々？ 100日間の船旅なんて初めてだからわからないものだらけ。そんな方でもご安心あれ。地球一周の船旅親善大使として活躍する経験豊富な三名が、体験談とアドバイスを教えてくださいました。



左・中) 泉英伸さん、千栄子さん。第81回地球一周クルーズ(南回り)に定年退職を機に夫婦で乗船。下船後は船内で覚えた南京玉すだれをボランティアで披露するなど精力的に活動。4/23に帰船する第97回クルーズに乗船。
右) 坂野井真弓さん。第91回地球一周クルーズ(北回り)に乗船。乗船前は飲食店を経営し、帰国後は船内で出会った若者らと都内にレストランをオープン。

③ ピースボートを知ったきっかけ

泉(英伸)・・・私がピースボートのことを知ったきっかけは、街で見かけたポスターでした。当時は仕事をしていたので、100日間も休むのは難しかったんです。しかしあと数年で定年を迎えるとなつたとき、仕事に没頭していた私を支えてくれた妻へのプレゼントとして乗船を検討するようになりました。そしてクルーズの説明会に参加してみたら、ちょうど定年の年に第81回地球一周クルーズがあることを知り、自分でも驚くほどなのですが、その場で申込書にサインしたんです。

泉(千栄子)・・・そのときは隣にいながら本当に行けるのかなという思いがありました。新聞でいつも広告を見ていたのも、ともとピースボートクルーズのことは知っ



ていました。パートの面接のときも、将来の夢を聞かれると世界一周と答えるくらいだったんです。ピースボートのことを知ってから実に10年以上、それがついに実現すると思うと嬉しくて仕方ありませんでした。それから不安よりも嬉しさのほうが勝って、いつも世界地図を見ていましたね。このあたりを船で通るんだと思うと、地図を眺めるだけで夢が膨むものです。

坂野井・・・私の場合は15年ほど前になりましたが、青森で自分のレストランを構えていたときに、お店にポスターを貼ってくれないかとボランティアスタッフが来たのがきっかけでし

③ 充実の船内生活

泉(千栄子)・・・乗る前に横浜の船内見学会に行つたのですが、そこで説明してくれた方が「やりたいことがたくさんあり船



た。私としても、こんなのがあったと驚き、すぐに問い合わせの電話をしたことを覚えています。最初は飲食店の経験を活かして船で働けないかと思ったのですが、それはできずに断念しました。それから10年ほどして東京に出てきたときのこと、たまたま通つたお店の前で目にしたのがピースボートのポスターでした。そこで乗船を断念した当時の記憶が蘇つたんですね。すぐにジャパングレイスに行き、第91回地球一周クルーズに乗ることになったんです。乗船が決まつてからは図書館で寄港地のことを調べる日々でした。

内生活は結構忙しい」と言っていたことが印象的でした。

泉(英伸)・・・本当にその通りで、100日間とはにかく時間が足りなかつたです。妻と一緒に参加した南京玉すだれの企画は皆勤賞。船を降りてからも施設のボランティア等で披露できるほどになったくらいです。これらを通して感じるのが、習い事をするには船内はすごくいい環境ということ。日本でなにか習い事をしようとなると、月謝を払ってもせいぜい月に数回程度。しかし船に乗つたらそれが無料で毎日受けられる。自分で楽しもうと思えばいくらでも楽しめる環境が整っています。

坂野井・・・私も最初は船内新聞を見ながらいろんな企画に参加して本当に忙しかつたです。次第にやることも決まってきた、私の場合はウクレレと和太鼓に集中しました。ウクレレなんて乗船前はさわつたこともなかったのに、降りる頃には歌いながら弾けるくらいになつていました。



デッキで海を見ながらウクレレを奏でて、それはもう至福の時間でした。

泉(英伸)・・・私もデッキにはよく足を運んだものです。

で、立場とか関係なく話せるんですね。そういった出会いがあるので一人にいる時も楽しく過ごせました。

泉(英伸)・・・たしかに生まれ育つた環境や学歴、どんな仕事をしてきたかなども関係なくて、皆が同じ食事をして同じ空間や時間を楽しめるのはピースボートならではかもしれませんね。さらに若者とシニアの世代を越えた交流も貴重な体験。私は運動会のように若者とシニアのつなぎ役としてチームの「会長」という役に任命されたこともありました。若者と一緒に旗や法被を作るなど、学生に戻つたようなかけがえのない日々を過ごしました。



③ 楽しむのも 楽しまないのも自分次第

泉(千栄子)・・・海をばーっと眺めているだけでも本当に楽しめますよね。イルカやクジラを見かけることもありました。またそこで居合わせた方々と話す機会があるのがとても楽しかったんです。それまでは出会つたことのないような人とも、一緒の船に乗っているというだけ

坂野井・・・実は「経営者集まれ」という乗船者による船内企画で、レストラン経営をしていた私も呼ばれたんですね。まわりはそうそうたるメンバーで恐れ多かつたのですが、そのとき話を聞きに来てくれた30代の男性が帰国後に一緒にお店をやらないかと誘ってくれたんです。それがきっかけとなつて都内にレストランをオープンしたんです。企画に参加していなかったら決して実現していなかったと思います。下船後にもつながれる出会いがあるというのはとても貴重ですよ。

Nice!

船上生活に 便利だった持ち物

約3カ月という長旅に何を持っていくかは悩みどころ。ここでは過去乗船者による持って行って便利だったものをご紹介。乗船に先駆けて船に荷物を送れるため、それもうまく活用したい。

船内用ポシェット

船内新聞や筆記用具などよく使うものを持って船室外に出かけよう。シンブルなものがおすすめ。



外貨を分けるための 小銭入れ

コインやお札の種類が多い寄港地でとても便利。



ネームホルダー

必ず持ち歩くIDカードや名札ケースとして。



坂野井さんの 1日

6:00	起床
6:30-6:45	モーニングコーヒー(デッキ)
7:00-7:30	朝食(メインレストラン)
8:00-9:00	音楽広場(ウクレレ)企画参加
9:30-10:00	無料英会話教室
12:00-13:00	昼食(デッキ)
14:00-15:30	和太鼓練習企画参加
16:30-17:30	水光業内人(ゲスト)講義参加
18:30-19:30	夕食(メインレストラン)
20:00-20:30	ウォーキング(10Fデッキ)
21:00-23:00	映画鑑賞
23:00-23:30	バーデー一杯
24:00	就寝

交流

Communication

世代も国籍も越えた 素敵な出会い

ピースボートは出会いの連続。
それも、きっと同じ船に乗り合わせて
いなかったら一生出会わなかったであろう
人たちがばかり。最近ではアジア各国からの
乗船者も増え、ますます活気づいている。



船内には座って話せる場所もたくさん。



日本の文化も外国の方に紹介。



定期的に開かれるバーベキューは絶好の交流の場に。



●夏祭り

浴衣があれば雰囲気も
出る。夏クルーズ以外
でも祭りは開催される。



●洋上結婚式 クルーズによっ
ては洋上の挙式があることも。同航者
の一員として参加してみたい。



のど自慢大会

友人の美声にギャラリーも拍手喝采。船内
はいつもアットホームだ。



ビンゴ大会

広めの会場はすぐに満員に。もしかした
ら豪華景品が当たるかも？

船旅の魅力は寄港地だけではない！

船内では若者からシニアまで一緒に楽しめる催し物がたく
さん。季節に合わせたイベントも多く、洋上で体験するそれら
のイベントはきっと一生の思い出に。



●運動会

ピースボートの人気イベント。いく
つかの色に分かれた各チームは旗
や法被を作って準備は万端。船内
の盛り上がりは最高潮に。



●フルーツパーティー

新鮮なフルーツは寄港地で仕入れ
る。珍しいフルーツも登場。(有料)

イベント

Events



船内生活

充実のクルーズを満喫する

Pickup

ピースボートの船内生活を語るのに不可欠
なものが大きく3つ。それが「食事」「イベ
ント」「交流」だ。特に最近はアジア各国から
の乗船者も増えたことで、食事バラエティ
に富み、船内にいながら国際交流ができる
など、ますますの盛り上がりを見せている。



船内の食事は栄養バランスの取れた和食がメイン。ウェイ
ター/ウェイトレスに通されるレストランの円卓はちょっとした
交流の場に。隣席の方に勇気を出して話しかけてみよう。



自分で組み合わ
せが作れるハンバ
ーは若者に人気。



船内で仕込む本
格的なキムチや
飲茶は本場の方
にも大好評。

食事

Meals

船内で食事をとれる場所は全部で3ヶ所。場所によって献立が異なり、自分が
好きなものを食べることができる。寄港地で新鮮な食材を仕入れ、その地に
ちなんだメニューが出ることも。それでも常に和食を食べられるのは嬉しい。

和食から寄港地にちなんだ食事まで



エグゼクティブ・シェフ
石崎啓之

体を動かしたい方

船内にはスポーツデッキやジムも完備。デッキでのウォーキングも可能だ。室内スペースでも卓球やヨガレッスンなどさまざまな形で体を動かすことができる。船内で開かれるスポーツ大会は毎回大盛り上がりだ。



サッカー大会

水先案内人が参加することも。サッカー経験者がやさしく教えてくれるから、女性も安心して参加できる。



卓球同好会

卓球大会では海外からの乗船者とペアを組んで試合をすることも。

友達をつくりたい方

一人での参加で友人ができるか不安だという方もご安心あれ。出身地や生まれた年など、さまざまなテーマでメンバーが大集合。企画で仲良くなったメンバーと一緒に寄港地巡りをする人もいるくらいだ。



どさん子集まれ

「北海道出身」や「北海道にゆかりのある人」というテーマで若者からシニアまで大集合。



87年集まれ

「1987年生まれ」でメンバー募集。船内新聞の集客効果は絶大だ。

音楽が好きな方

楽器を使ったものからコーラスまで、ジャンルはさまざま。発表会に向け、船内のいたるところで練習が行われている。友人の晴れ舞台を一目見ようと、発表会には多くのギャラリーで会場が埋め尽くされる。



詩吟同好会

今まであまり触れる機会がなかった「詩吟」には乗船者も興味津々。



フラを踊りましょう

リズムの取り方からステップまで先生が丁寧に指導。



ウクレレ演奏

下船後も続けようと寄港地でウクレレを購入する人も多い。

文化系が好きな方

「絵画」や「切り絵」をはじめ「南京玉すだれ」など、普段では習えないような特徴的な企画も多数。初心者でも、下船時にはすっかりマスターしている場合がほとんど。下船後に趣味として続ける人も多くいる。



各教室展示会

手が込んだ素敵な作品がフリースペースを彩る。下船後の家族へのプレゼントなど、作る人によって想いはさまざま。



浴衣着付け教室

夏祭りの前日には着付け教室も行われる。当日は自分で着付けにチャレンジ。



南京玉すだれ

ピースボートで行われる有名企画。「あ、さて。あ、さて」と掛け声が聞こえてくる。



船内生活

自分たちでイベントをつくる

自主企画

船内には、乗船者発案の「自主企画」もたくさんあるのがピースボートの大きな特長。乗船者の方の趣味や特技など、テーマは自由。もちろんスタッフがサポートしてくれるから、はじめての方でも安心。どんな企画ができるかはあなた次第だ。自主企画で使えるものはぜひ船に持ち込んでおきたい。



自主企画申請広場

フリースペースにて行われる自主企画の申請会。



その日の企画は毎日部屋に届く船内新聞で知ることができる。

💡 あなたのちょっとしたアイデアが、きっと皆さんにも喜んでいただけることでしょう！

船上百景 [展望大浴場～世界湯～]



広々とした開放的なスペース。浴場全体に明るい日差しが降り注ぐ。

世界の海を眺望しながら くつろげる展望大浴場がオープン

第97回地球一周クルーズからオーシャン
ドリーム号7階後方デッキに新設された展望
大浴場「世界湯」。予約も不要という気軽さ
からオープン以来、老若男女で賑わっている。

毎日入浴しに来ているという60代の男性に
聞くと「ゆつくりと脚も伸ばせますし、なに
より世界の海を見ながらお風呂に入れるな
んて夢のような気分です。デッキから浴場が
見えないように屋根は斜めのスリット状に
なっているのですが、青空も充分に望むこと
ができるんですよ。サウナも併設されていま
すし、申し分ありません」

ゆつくりと続く航跡を見ながら、これま
で、そしてこれからの船旅に思いを馳せる―。
飛行機の旅では決して味わえない至福の時間
があなたのことを待っている。



ゆったりと癒されるひととき。



ほのかな木の香りが漂う新設されたサウナ。



今冬、北米大陸では記録的寒
波に見舞われ、「ありえないもの
が凍った」という驚愕のニュースが
世界中に流れました。その正体
は、今号で特集したナイアガラ
の滝でした。完全凍結に近い状態
で、滝全体が白く幻想的な冬景
色となったというから驚きです。

そんな寒さ厳しい冬も過ぎ去
り、いつの間にか新緑が生い茂る季
節となりました。寒かった頃は室
内から出られずにいたのですが、
春になつて映画館へ行きましたの
でその映画をご紹介します。今年
2月公開の「ナチュラウーマン」。
最初にイグアスの滝が登場します
が舞台はブラジル・アルゼンチンと
同じく南米のチリ。主人公が自分
らしさを貫いて差別や偏見に立
ち向かうという作品です。以前
クルーズでも訪れたことのある
サンティアゴの街に懐かしさを感じ
ました。乗船前から寄港地に
まつわる映画や本に触れるのは
とてもおすすめです。

春は出会いの季節。素敵な出
会いを探しに外へ出かけてみま
せんか。(S・N)